

安全保障 security

●国家の安全保障

一般的に、安全保障といえば、国家間の紛争や国家の軍事・防衛をめぐる問題、いわゆる国家安全保障 (national security) ないし国際安全保障 (international security) といった印象が強い。たとえば、『広辞苑』で安全保障の用語を引いてみると、「外部からの侵略に対して国家および国民を保障すること」と定義されている。これらのイメージはあながち間違いではない。安全保障論 (Security Studies) は、国際紛争や軍事・防衛の問題が重要であるからこそ、大学の授業や講座において設けられているのである (山本・河野 2005: 2)。そもそも、安全保障論の誕生に大きな影響を与えた国際政治学 (International Politics) それ自身が、1,800万人の死者を出した第一次世界大戦を契機として生まれた。「戦争を防止しようとする熱意にあふれた要求が、この学 (筆者注: 国際政治学) へのはじめの進路と方向をすべて決定した」(カー 1996: 31) のである。

現在、紛争の死者数は年間 18 万人 (2004 年時点、世界保健機関) となっており、紛争や迫害による難民や国内避難民は 4,200 万人 (2009 年時点、国連難民高等弁務官事務所) にもなる。このような人道危機を座して見過ごす正当な理由はない。紛争解決と安全保障の問題は、国際政治学においてきわめて重要な研究テーマであり続けている。

●国家の安全保障と人間の安全保障

しかしながら、安全保障で取り扱う問題は、国家の軍事・防衛をめぐる問題だけではなく、安全保障とは、「人間なり、人間の集団が、核心的な価値を喪失したり、剥奪されたりする事象に関するもの」で、ここでいう「安全とは、核心的な価値を維持する状態であり、安全保障とはそれを守ること」である (山本・河野 2005: 2)。そして、核心的な価値とは、「生存、自由、自立性、財産など」を意味する (山本・河野 2005: 2)。この定義にしたがえば、軍事・防衛のみならず、経済、貧困、環境、文化、情報といった多様な分野においても、安全保障上の脅威の源泉が存在するといえる。どの脅威が一番重要であるかを議論することはあまり意味がない。安全保障として取り扱う脅威は、当事者の状況認識や時代によって大きく異なるからである。

安全保障を考えること、それは、「誰が、誰のために、どのような脅威から、いかに核心的な価値を守るか」を考えることにほかならない。この哲学的な問いをあらためて提起したのが、「人間の安全保障」(human security) という概念の表出であった。人間の安全保障は、「恐怖からの自由」(freedom from fear) と「欠如からの自由」(freedom from want) を実現するために、国連開発計画 (UNDP) の『人間開発報告書 1994』において提起された概念である。UNDP は「国家の安全保障という狭義の概念から、『人間の安

全保障』という包括的な概念に移行すべき」(国連開発計画 1994: 24) と主張した。

とはいえ、人間の安全保障は、国家の安全保障と相互補完的な役割を担っている。人間の安全保障委員会が指摘するように、「『人間の安全保障』なしに国家の安全保障を実現することはできないし、その逆も同然である。『人間の安全保障』実現のためには強靱で安定した制度が必要であり、その裾野は一定の現象に焦点を当てる国家の安全保障よりも幅広い」(人間の安全保障委員会 2003: 13-14) といえるからである。

にもかかわらず、人間の安全保障という概念は、国家と安全保障をひとまず切り離すことで、「『人間』という本来の『安全』の主体について論じられる空間が初めてつくりだされた」(武者小路 2009: 3) との肯定的な評価を与えることができよう。

●安全保障と生存基盤

それでは、安全保障と生存基盤はどのようなつながりがあるのだろうか。講座生存基盤論では、ケア (care) を軸とし

て、人間圏の再構築を試みている。このケアと安全保障には密接な関係がある。security の語源は、「不安や心配 (cura)」が「ない (se)」という、ラテン語の securus にある。この cura は、古代ローマの女神「ケーラ」のことで、英語でいうケアにほかならない。倫理学者の高橋隆雄は、古代ローマの伝統において、ケアには二つの意味があったことを指摘している。一つは、自己の (1) 気がかり、心配、心の重荷である。もう一つは、他者への (2) 幸福、献身、配慮という意味である (高橋 2001: 4)。すなわち、安全保障とは、「気がかり、心配、心の重荷がない状態を維持する」とともに、他者への「幸福、献身、配慮」をも意味する。ケアを軸に人間圏の再構築を考えること、それは安全保障概念の根本に立ち返ることで、同概念のさらなる深化を試みるということと同じなのである。

▶ 関連用語：安全保障のジレンマ、国連平和維持活動、食糧安全保障、人道支援 (人道援助)、人道的介入

文献

- 赤根谷達雄・落合浩太郎編 2001. 『新しい安全保障論の視座』亜紀書房。
 カー、E. H. 著、井上茂訳 1996. 『危機の二十年』岩波書店。
 国連開発計画 1994. 『人間開発報告書 1994』国際協力出版会。
 武者小路公秀 2009. 『羅針盤としての『人間の安全保障』』武者小路公秀編『人間の安全保障』ミネルヴァ書房。
 人間の安全保障委員会 2003. 『安全保障の今日的課題』朝日新聞社。
 佐藤誠・安藤次男編 2004. 『人間の安全保障』東信堂。
 高橋隆雄 2001. 『ケア論の素描と本書の構成』中山将・高橋隆雄編『ケア論の射程』九州大学出版会。
 山本吉宣・河野勝 2005. 『安全保障とその政治学的研究』山本吉宣・河野勝編『アクセス安全保障論』日本経済評論社。

(佐藤史郎)